左沢楯山城跡 縄張図

左沢楯山城は、北・東が檜木沢、南が最上川に面した急峻な崖を持つ中世のお城です。このような立地に加え、城内各所にもさまざまな「守る」ための工夫が施されています。下の図は楯山城跡の一部ですが、そのような工夫を少しみてみましょう。

【縄張(なわばり)】
城のレイアウト、構造のこと。曲輪の配置や虎口の防禦の構えなどをいう。

【八幡座】
一番高い場所周辺です。発掘の成果や伝承から宗教的な建物があった場所と考えられています。

標高／222.13m

八幡平

楯山公園

【寺屋敷】
迎賓館的な空間と考えられます。発掘調査では、池の可能性のある石組みも見つかっています。また、発掘により何回も建替えられた建物跡が見つかり、地名や文献から一時寺があった可能性が指摘されています。

蛇沢

檜木沢

【堀切】
堀切を「堀底道」が通っていたと考えられています。城へ攻め込んでここへ至ると、上方左右両側から攻撃されます。

元屋敷

【堀切南側の曲輪群】
蛇沢側から最上川へ、堀切を通りこの曲輪群を下ります。(あるいは逆：ここを登り堀切へ)
曲輪は最上川のそばまで続き、下の曲輪ほど川が近くに見えて、川音も大きく聞こえます。

最上川
標高／約112m

やな場

標高／約180m

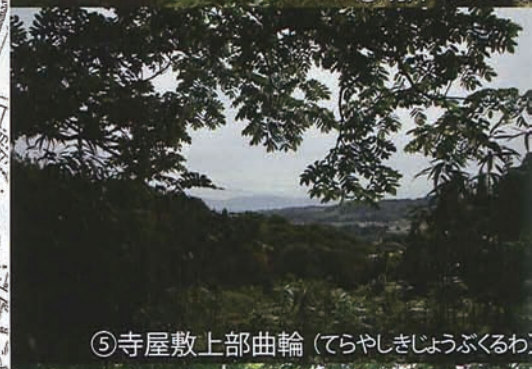
【千畳敷】
川音を響かせ、眼下を流れる最上川を押さえる場所と考えられています。また、八幡座周辺をよく見通せる場所です。

①井戸（いど）

②建物跡（たてものあと）

③寺屋敷（てらやしき）

④切岸（きりぎし）


⑤寺屋敷上部曲輪（てらやしきじょうぶくるわ）

⑫帯曲輪（おびぐるわ）

⑪千畳敷（せんじょうじき）

⑩曲輪群（くるわぐん）

⑨虎口（こぐち）

⑧八幡座（はちまんざ）

⑦主殿推定地（しゅでんすいていち）

⑥堀切（ほりきり）

A「左沢絵図面」は18世紀(江戸時代)、Bは明治21年頃作られた図面です。どちらも当時の左沢周辺の様子を表しています。今の地図と比べてみると、変わったところと変わらないところが分かります。Cは明治中頃の原町の図です。

C 明治中頃の地籍図（個人所有）

B. 明治21年頃の左沢村

A.「左沢絵図面」（町内の寺院所蔵）

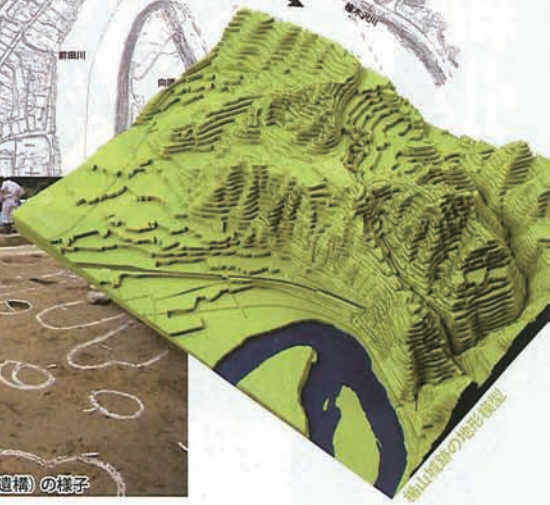
左沢楯山城跡が大江氏のお城として機能していた中世は、城（楯山）のすぐふもとから最上川にかけて、「元屋敷」周辺に人々の住む居館があったと考えられています。中世の戦国時代が終わり江戸時代に入ると、酒井直次が「小漆川」に城を築きました。そして今の左沢の町中にあたる場所で町割りを行いました。これが近世も継承され、現在の町につながっています。その間、町は東西南北につながる交通の要の地であったと考えられています。

中世～近世～近代、そして現代といった町の移り変わりに思いをはせながら、楯山公園から町並みと最上川を眺め、通り過ぎていった人を思い町中を散策すると、町の新しい表情と出会えるのではないでしょうか。

左沢楯山城跡の縄張図

左沢楯山城跡の全景（空撮）

発掘調査（柱穴遺構）の様子



楯山城跡の地形模型

山城は名前のとおり山の地形を利用した城です。平坦面とがけ（曲輪・切岸）や、堀切・虎口といった防御構造を、敵が攻めづらいよう工夫して配置しています（城の縄張り）。また、左沢楯山城跡の「寺屋敷」が檜沢沿いの主要街道を通る人に見せる場所でもあったと推定されるように、左沢楯山城の堅固な守りを最上川などを通る人に見せつける、「攻めたくない」と思わせる抑止力の面からも、最上川や交通の要所を押さえてきた城だったと考えられています。当時山城をつくるための大規模な土木工事には、大変な労力が費やされたことでしょう。そのような犠牲を払って築かれた城は、その時代、領内に暮した人々の命を戦から守るための巨大な施設でした。

①楯山公園から眺めた最上川（右側が上流です）／②楯山ふもとのやなば跡／③最上川下流から楯山を望んだ様子／④城内の防御構造（堀切周辺）／⑤川から眺めた楯山城跡（人が立っている岩盤部分は通常水が流れている場所です）／⑥「段々畑」のように曲輪が連なる様子